

「あなたにはわたしがっている」

～主の語りかけを聞く～

「ある夜、主は幻の中で、パウロに言われました。『恐れるな。語り続けなさい。やめてはいけない。わたしがっている。だれもあなたに危害を加えることはできない。この町には、わたしにつく者がたくさんいる。』」使徒行伝18章10・11節[リビングバイブル]

クリスチャンジャーナリストのフィリップ・ヤンシーさんの文章です。

「合衆国の世論調査は、信じている宗教を聞かれて『無宗教』と断言する人の数が着実な増加を示している(1957年には人口の2.7%、2009年には16%)。…。その数は1990年の2倍であり、ヨーロッパの無宗教の割合はさらに高い。

不思議なことに、無宗教を主張する回答者の3分の2が、それでも神の存在を信じていると言う。組織化された宗教を偽善的とか不適切とかと判断する人もいれば、単に、神を信じて何になるのかと問う人もいる。西洋世界が『無神論の共産主義』に抵抗していた時代、宗教は重要な防壁であるかに見えた。しかし、今や私たちの最も顕著な敵は宗教的過激派である。多くの人々が信仰の価値を疑っているのも無理はない。」

また、来週のサントミュージゼでのメッセンジャーである大嶋重徳先生の書物には、

「現代はポストモダン(近代以降)と呼ばれる時代です。近代という時代に『これが真理だ』と叫ばれた主義・思想は、ベルリンの壁と同時に壊れていきました。そして今や『絶対的な真理などない』と言われ、世界はあらゆるレベルで、相対主義的で、多元主義的な価値観へと変化していきました。しかし、この国で『価値なんて一つじゃないよね』と言いながら、それでは人間は生きてはいけないことを明らかにしたのは、1990年代にオウム真理教にハマった若者たちの存在です。どこかに真理があるはずだと考えた真面目な若者たちが辿り着いたのが、暴力的なカルトであったことはこの国を震撼させました。生きる指標がないということが、人を不安にさせることを時代は認識したのです。あの事件が起こって今なお、若者たちの超自然的な価値判断を求め、絶対的な指針を求める人間の姿は、失われていません。また、スポーツ選手たちの『最後は自分を信じました！』という言葉には、最後は自分を信じるしかない人間の悲しさを思い知らされます。結局、自分の人生の指針は、自分にとって心地よい何かを選び取るしかないのが現実です。」と記されていました。

なるほど、私たちはそのような時代の中でクリスチャンとして生き、福音を伝えようとしているのだと理解する必要があります。ある意味、今まで通りには行かない。されど、福音自身には変わらない真理と力があります。私たちがもっともその福音＝イエス様が語っておられること＝を知り、体験し、聖霊様を通して、力を頂いていく必要を感じています。来週のサントミュージゼを期待し、主の働きが私たちの内にもなされるように祈り続けましょう！